

道徳の力で 災害に備えよう

—— 家族の愛を見える形に



かまた のぶひろ
株式会社タフ・ジャパン 代表 鎌田修広

昭和44年(1969年)、神奈川県生まれ。日本体育大学社会体育学科卒業、在学中にトライアスロン部を創設し初代主将を務める。平成4年、就職した紳士服チェーンでトップセールスマンとなる。消防職員となった友人の薦めで翌年、横浜市消防局へ入局。消防訓練センターの体育訓練担当教官となり、三千人を超える職員の新たな体育指導法を確立、総務省消防庁消防大学校における「消防体育訓練」講師等も担当。23年、退職し、防災研修や人生育成事業を行う(株)タフ・ジャパンを設立。代表取締役となる。著書に『生涯現役消防筋肉』『消防メンタル』(イカロス出版)がある。

道徳の力で災害に強くなる

—— 日本では昨今、大規模災害が相次ぎ、日常的に「防災」の二文字を耳にするようになりました。鎌田さんは専門家のお立場から、住民レベルで防災意識を高めるには、「道徳」の教育が不可欠とお考えだそうですね。

鎌田 はい。災害に強い「災強」の街づくりを実現していくうえで、核になるのが道徳です。東日本大震災、熊本地震もあって、個人で災害への備えをする方が増えてはいますが、残念ながら「防災」イコール備蓄品を買って終わりという方が多いのが現実です。もちろん、備蓄品も大切ですが、食料の不足はなんとかなるんです。それより大切なのは、災害から命を守ることです。

その点、被害をできるだけ小さくする「減災」の取り組みが上手な地域は例外なく、住んでいる方同士が「心の絆」で結ばれています。例えば、ふだんから顔を合わせれば立ち話をし、おすそ分けもし合う近所づきあいのある地域では、互いの顔と名前が一致する関係性が成り立っています。

災害時には、地域にこの「顔と名前が一致する」関係があるかどうかで、被害の度合いが大きく変わってくるんです。なぜかという



特集

でんと構える

守るために備えよう

と、仮に家屋が倒れたり火災になったときに、あの家は〇〇さんが住んでいて、家族構成がどうかをご近所が把握していると、迅速で的確な救助や救出ができるからです。

——最近では都市部だけでなく、隣に誰が住んでいるかもわからないという関係の地域が増えていきます。それで普段は困ることはなく、災害時に弱さが表れるのですね。

鎌田 そのとおりです。私は二十五歳の時から約十八年、横浜市の消防局に勤めていました。入って二年後に起きた阪神・淡路大震災では同時多発的に火災が起き、現地の消防は、火災の消火優先か、生き埋めになった人命の救助か、ギリギリの判断を迫られました。そこでの教訓から、消防は火災対応のプロフェッショナルとの原点に立ち返り、消火活動を優先すべきというのが、現在の基本的な姿勢です。そうなりますと、人命救助や救出は、消防団や地域の住民たち自身が支え合い、助け合って、「減災」に一体となって取り組んでいく必要がでてきました。

——大規模災害が起きたら、消防に頼ればいいという他人任せの姿勢では危ういということですね。そう思うと、自分の住む地域の防災力がどうなのか、気になってきます。

鎌田 そこで先ほどの顔と名前が一致する

関係づくりができているのが問われるんです。それを進めるには、仕組みややり方だけでなく、その根底に、自分の命と同じくらい、隣の人の命を大切に思う「道徳心」があることがとても重要なのです。

——自分さえよければいいと考える人ばかりなら、互助や共助も進まないでしょうね。

鎌田 互助や共助とは言葉を変えれば、家族愛や隣人愛、郷土愛を見える形にして備えるということですね。たとえば最近では、地域の町会や学校ごとに防災倉庫を備えるところが増えていきます。自助の取り組みとしてはいいのですが、鍵が個々の管理のため、有事の際に、仮に目の前に倉庫があつたとしても部外者が使えないという事態になります。

そこで東京のある地域では、町会と近くの保育園がお互いの倉庫の合鍵を持ち、万一の時は活用し合い、助け合おうという「鍵預け」を実現しています。共助・互助をスローガンだけでなく、見える形にした一つのモデルケースです。

モラルジレンマに備えるために

——防災と道徳を一体で行う大切さはよく



わかりました。ただ実際にどうやって防災に道徳教育を取り込んでいくのですか。

鎌田 ポイントはそこなんです。「防災道徳」という形の教育の実例がないため、ここは「防災」の勉強、これは「道徳」の勉強と切り分けられてしまい、見える形での行動につながっていきません。一つ例を挙げれば、災害や避難の現場で誰もが体験し得る「モラルジレンマ」は防災の問題でもあり、道徳の問題でもあります。

——「モラルジレンマ」というのは？

鎌田 直訳すると「道徳的な葛藤かっとう」ですが、例えば、大地震による長い避難生活のなかで、寒さに凍える高齢者や幼子のため暖房用の発電機を動かすとします。でも燃料のガソリンがなく、給油するには遠方まで寒い中、大行列を待たなければなりません。その時、瓦礫がれきの中に横たわる車からガソリンを抜き取りつつでも、発電機を動かすべきか。壊れているとはいえ、車は他人のもので。平常ならば許される行為ではありません。大災害の避難所生活のような非日常では、こうした道徳心が激しく揺さぶられる「モラルジレンマ」の課題がたくさん出てくるのです。

また東日本大震災では、津波から逃れる際に、大切な人を救いに行くべきか、自分の命

を優先すべきか、瞬時の決断に迫られる経験をした方が大勢おられます。「もし災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」。そんな問いから被災者の声や経験を集めた、内閣府の「一日前プロジェクト」のページには、「こうならないように、もっと〇〇しておけばよかった」というような文章が数多く綴つづられています。

そうした情報を目にしても、これだけ大災害が続いても、つい「自分が、当事者になることはない」と根拠なく考えてしまうのが私たちです。そういう心理を乗り越えて、万一の有事にどう考え、どう行動するかという「防災道徳」の教育や備えをしていかなければ、災害に強くなれません。そのための具体的な仕掛けを、少しずつながら今、進めているところです。

災害心理に勝つ方法

——今は民間の立場から、具体的にどんなことをされているのですか。

鎌田 四十二歳で消防局を離れて、タフ・ジャパンという会社を立ち上げ、道徳心に基づく住民主体の防災の実現に取り組んでいます。先ほど申し上げたとおり、人間には誰し

でんと構える

守るために備えよう

鎌田さんが毎日携帯している防災バッグ。ぶどう糖や応急手当用品など最低限のものが備えられている。19種類も入っているのに、女性の手のひらにものるほどコンパクト



も、心の平穏を保とうとするあまり、危機が迫っても「自分は大丈夫」と思いこむ「正常性バイアス」という心理があります。

ひと言でいえば、防災とは災害それ自体と闘うというより、自分たちの心の内側にある「災害心理」と闘うことだと言えるのかもしれない。ではどう闘うか、です。防災や道徳の勉強をしましょうと正面から呼びかけても、関心を持っていただけません。楽しみながら、知らないうちに防災も道徳も学んでいた……。そんな学びと体験の場として、「霞が関防災キャンプ」という一泊二日のプログラムを毎年行っています。

キャンプといっても屋外ではありません。

震災発生時の帰宅困難を想定して、その場に初めて居合わせた参加者同士がグループを組み、水、トイレ、食事、照明が制限されたビルの一室で課題に立ち向かい、十五時間を生き抜きます。ポイントは解散して終わりにしないこと。日常に戻れば、すぐに災害心理が働いて、具体的な備えにつながりません。

そこでグループを組んだ人同士で「メーリングリスト」をつくり、三週間以内に三つの行動を起こせるかどうか、個々の取り組みを共有し合う仕掛けをしています。例えば、「家族と話して、災害時の集合場所を決めました」という報告をAさんがメーリングリストに流す。すると、グループのみんなから「よく話し合ったね」「どこに決めたの」など、評価されたり、反応があるわけです。それがまた励みになって次の行動につながり、楽しみながらだんだんと防災体質が身につけていきます。

——一人では災害心理に負けそうになるところ、期限を決め、仲間との絆によって、無理なく背中が押されるわけですね。とても実践的な防災訓練という感じがします。

鎌田 私自身、消防局時代は、企業や地域で型どおりの防災訓練を指導しつつづけていた反省があります。決まった動きをし、上から目線で情報を伝え、何か質問はありませんか



と尋ねて終わる。残念ながら、こうした訓練をどれだけ繰り返しても、生きた行動にはつながりません。そうした防災指導への限界に葛藤をしつづけた消防局時代の時間が、今の私の活動につながっています。

家族を愛するなら備えを

——そうした防災道徳への取り組みとして、まず個人としてできる行動とえば、どんなことがありますか。

鎌田 基本は、自分の命は自分で守る備えをすることですね。そこが疎かおろそかであつたら、隣の人の命を救うことなどできません。例えば、大地震が起きた時、家の中のどこに集まれば一番安全かという「セーフティゾーン」を家族で共有しているでしょうか。窓際は避けるにしても、タンスが倒れてきたり、天井の照明や時計が落ちてきたり、意外に安全な場所というのは限られるものです。小さなお子さんやご高齢の家族がいる家庭は、特にこの確認が重要です。

あと鎌田家では、自宅が海岸に近いこともあり、妻と子と三人分のライフジャケットを寝室の壁にかけています。名前や住所だけでなく、輸血の場合を想定して、それぞれの血

液型まで書き込みました。それさえ着ていれば、万一津波で流されたり、ケガをしても助かる確率が増えるし、仮に命を落としても遺体として浮いてくる可能性が高くなります。

——そこまで見える形での備えがあれば、家族の安心にもつながりますね。

鎌田 死と向き合う防災に取り組むなかで、「家族愛」を見える形にし、できる限りの備えをすることは、道徳実践の一つでもあるように感じています。

私は疑似体験として、棺かみおけに入ったことがあります。意外と狭くて、息苦しい空間のなか、亡くなる時の気持ちを想像してみました。まず思ったのは、「まだまだやり残したことがたくさんある」という思いです。そしてもう一つ、災害で命を落としたとして、「あいつの言うことを聞くんじゃないかった」とか誰かを恨うらんで死にたくはないということでした。「パーセントでも生き残る確率を増やそうと、ベストを尽くしてきた。それでこうなるなら仕方がない」。そのような覚悟をもって日々を過ごせることが、自分や家族、そして関わる人々の安心につながるのではないのでしょうか。本気で災害にタフな日本をつくるため、一人でも多くの人に「防災道徳」を広げていきたいと思っています。